

大学入試英語問題語彙の妥当性と実用性の時代的变化

1. はじめに

日本の大学入試英語問題で扱われる英語は、入学試験のための特殊な英語とされ、いわゆる「受験英語」と称される。「受験英語」の起源は、明治 36 年(1903)に出版された南日恒太郎著『難問分類英文詳解』にあるとされるが(川澄, 1978; 若林, 1988) 以来 100 年以上たった現在、「さすがに珍問、奇問は少なくなったものの、中学から高校へどんな勉強をしてきた受験生なのかという認識が欠如している問題を平気で出す大学も目につく」(田崎, 2000: 19)という指摘がある。関連して、Watkins 他(1997)は、受験英語についての特質と出題に関わる諸問題を具体的に分類し、「現在のような難解な、高校教育を全く無視したような入試問題がある限り受験生の負担は増えるだけである」(p.50)と述べている。同様の意見は、新里(1990)、酒井(1996)、小林(2000)などにも見られる。

一方、別府(2003)によれば、昨今の大学入試の英語問題は「英文和訳問題や細かい文法問題が中心」という「イメージ」から脱却し、「長文問題や会話問題の増加」、「細かい知識を問う問題の減少」、「私立大学入試問題における英文和訳問題の比重の小ささ」が「現実」であるという¹⁾。さらに深沢(1999)は、1989~1998 年の 10 年間の国立大学約 60 の入試英語のライティング問題の推移を問題形式別に調査した結果、和文英訳の減少と自由英作文の増加を認め、ライティングにおいても入試問題は変化していることを報告している。

このような英文読解やライティングにおける問題形式の変化、特殊な構文・文法および瑣末な知識を問う問題の減少を歓迎する声に対し、大学入試の英語問題に使用される「語彙」の難易度が依然として高すぎるのではないかという指摘がある。たとえば、小林(2003)は 1982 年度と 2002 年度の入試問題を各 1000 題無作為に選び比較したところ、長文で使用される頻出単語に有意な差は無かったという。したがって、学習指導要領が改訂され、「中高で学習する単語数が少なければ少ないほど、入試の語彙レベルとの差が大きくなり、それだけ受験対策のための負担が大きくなる」(p.8)と述べている。

関連調査として、長文読解問題に使用される語彙レベルの妥当性について、中條・長谷川(2004)は、中高英語教科書語彙のカバー率とリーダビリティの観点から、過去 10 年分(1993~2002)のセンター試験と 2002 年実施の国公立・私立合計 26 大学 40 学部の入試問題を分析した。その結果、センター試験では年度による差は多少あるものの、語彙のカバー率とリーダビリティからはほぼ適正なレベルと判定された。一方、個別の大学入試

問題では、中高英語教科書語彙で対応できる問題は 4 学部 (10%)、高校卒業レベルとして適切なリーダビリティのものは 12 学部 (30%) にとどまった²。また、Matsuo(2000) は 1991 年から 1997 年までのセンター試験 7 年分、および国公立・私立各 60 大学の入試英語読解問題と高校教科書 7 種類を比較し、その語彙の重なり量から高校教科書だけでは大学入試に対応できないという深刻な状況を報告している。

さらに、長文読解問題だけでなく、文法問題なども含めた試験問題全体で使用される語彙を対象にした調査に長谷川 (2003) がある。長谷川はセンター試験を対象に、中高英語教科書語彙のカバー率を 1993~2002 年の 10 年間にわたって通時的調査をした。その結果から、センター試験においては、高校で難易度上級の教科書を使用した場合でも、カバー率がテキスト理解の閾値とされる 95% 以上になるのは、困難な年度が多いことを報告している。しかしながら、個別の大学入試問題については、問題全体で使用される語彙の難易度を調査した報告はこれまでに無い。

近年、大学生の学力低下が問題となっているが、大学生の学力低下が指摘され始めたのは 1990 年代であると言われる (佐藤, 2001; 苅谷, 2003)。また、大学生の学力は小学校から高等学校までの学習の積み重ねであるとするれば、英語は中・高の学習の積み重ねである。伊村 (2003: 117) によれば、中・高で学習される英語の新語数の合計は、昭和 26 年 (1951) 以来、学習指導要領が約 10 年ごとに改訂されるたびに減少している。大学生の学力低下との関連で、1990 年代とその前後を見れば、1980 年代、1990 年代、2000 年代の順で、2,300~2,950 語 2,900 語 2,700 語となっている。したがって、実際に大学入試に出題される英語問題語彙の難易度を判定するためには、中高英語教科書語彙との関係で、このような時代的な変化を考慮にいれた調査が必要であると考えられる。

そこで、様々な議論がある日本の大学入試英語問題の現状に鑑み、センター試験および個別の大学入学試験の英語問題全体について、中高英語教科書語彙から見た語彙レベルの妥当性を、時代の推移にしたがって調査することにした。調査年代は、大学生の学力低下が指摘され出した 1990 年代を中心に、1980 年代、1990 年代、2000 年代という時代区分で行った。また同時に、昨今、急速に高まりつつある実践的コミュニケーション能力育成のための英語教育において、「大学入試英語問題語彙」がどの程度寄与できるかを、実用性の面から定量的・定質的に調査することにした。そして、大学での英語教育を効果的に行う上で、「中高英語教科書語彙」に「大学入試英語問題語彙」を加えた、大学入学時の英語学習者の語彙力の上限を時代の推移とともに実用面から推定しようと試みた。

2 . 研究の目的

大学入試英語問題（共通一次・センター試験問題³、および国公立⁴・私立大学の個別試験問題）に使用される語彙が、中高英語教科書語彙から見て妥当であるかを、1980 年代、1990 年代、2000 年代の時代区分により定点観察をする。また同時に、大学入試問題の語彙が時代の推移とともにどのような量的・質的变化を遂げているかを、実用性に対する大学入学時の学生の語彙レベルの上限という視点から調査する。

3 . 研究の方法

3.1 調査対象とする言語材料

1980 年以降の高等学校学習指導要領の改訂施行年度は、1982 年、1994 年、2003 年であり、各々 3 年後が当該学習指導要領で学習した生徒の最初の大学入学試験となる。したがって、2003 年施行の学習指導要領による大学入試は 2006 年の開始であってまだ実施されていない。さらに、中・高学習指導要領の接続年度がずれている年がある⁵ことを考慮に入れて、1988 年、1998 年、2004 年の大学入試を調査対象とした。大学入試問題は、共通一次・センター試験問題と、一般に難関校と言われ学習者が目標とすると考えられる国公立・私立の 16 大学（国公立 8 大学、私立 8 大学）⁶の個別試験問題を選定した。比較対象とする中・高英語教科書は、各入試年度に対応した高校英語教科書を基準とした⁷。詳細は下記のとおりである。

（1）共通一次・センター試験英語問題

1988 年実施共通一次試験（本試験）、および 1998 年と 2004 年実施のセンター試験（本試験）とし、次のデータベースから必要部分を使用した。

『センターTen 英語』（ジェイシー教育研究所、2003）

『センターTen Plus 英語』（ジェイシー教育研究所、2004）

（2）大学個別入学試験英語問題

将来英語を直接使用する機会が比較的多いと考えられる学部・学科で、3 年代を通じて同一大学での比較となるように、1988 年、1998 年、2004 年実施の国公立 8 大学、私立 8 大学、合計 16 大学の文学部（英文科）もしくは経済学部の問題とした。国公立 8 大学の内訳は、旧帝国大学 4 校（東京大学、東北大学、京都大学、九州大学）、首都圏新制大学 4 校（筑波大学、千葉大学、横浜国立大学、東京都立大学⁸）、私立 8 大学の内訳は、東京都

内 4 大学 (早稲田、慶應義塾、上智、青山学院)、関西圏内 4 大学 (関西学院、関西、同志社、立命館) である。使用した資料とデータベースは、次のとおりである。

『昭和 63 年 全国大学入試問題正解 英語 国公立大編』(旺文社, 1988)

『昭和 63 年 全国大学入試問題正解 英語 私立大編』(旺文社, 1988)

『Xam '98 全国大学入試問題データベース 英語』(ジェイシー教育研究所, 1998)

『Xam 2004 全国大学入試問題データベース 英語』(ジェイシー教育研究所, 2004)

(3) 中学・高等学校英語教科書

中学校から高等学校までひとりの生徒が英語学習のために使用する教科書は、中・高で各 1 シリーズの教科書であることが多いので、中・高ともに 1980 年代から 2000 年代まで採択数上位にあった教科書シリーズより選定した (cf. 『内外教育』, 『教科書レポート』)。高等学校用は、大学進学者の多い普通高校で一般に使用されと考えられる「英語」「英語」「リーディング (1980 年代は英語 B)」とした。本調査で使用した教科書は以下のものであり、各教科書の「各課の本文」と「Supplementary Reading」を調査対象とした。

中学校 : *New Horizon 1, 2, 3* (東京書籍, 1988, 2000)

高等学校 : *Unicorn* (文英堂, 1987, 1997), (ibid., 1988, 1998),

Reading (ibid., 1999), *B* (ibid., 1988)

3.2 調査項目と分析方法

本調査で使用した言語材料は、電子化されているものはデジタルデータを利用し、電子化されていないものはスキャナを使用して入力後、校正し、単語の変化形を基本形に集約した語彙リストを作成した。特定のテキストに多く出現して計測結果に影響を与えやすい固有名詞・数詞・略語・間投詞・記号は削除した。加えて、大学入試英語問題から注釈の付いている語を全て削除した。

言語材料のうち、1980 年代から 2000 年代までの大学入試英語問題語彙の時代的变化を多角的に探るため、1988 年、1998 年、2004 年の各々共通一次・センター試験問題語彙と個別大学試験問題語彙に対する比較調査項目は、下記の 5 項目 (1)~(5)) とした。

(1) 各入試問題の延べ語数と異語数

本研究では、読解問題のみならず文法問題等も含めた各入試問題全体で使用される語彙の量的変化を探るため、各問題で使用される英単語の延べ語数と異語数を求めて、年代順に比較した。

(2) 各入試問題に出現した語彙に対する中高英語教科書語彙の割合(カバー率)

各入試英語問題の延べ語数に対し、その何%を中高英語教科書語彙でカバーできるかを、年度ごとに求めて比較した。現在、語彙研究の分野では英文の内容を理解するためには、当該英文の 95%以上にあたる語彙数が最低限必要であるという「95%カバー率」を支持する研究者の意見が主流である (Nation, 2001)。そこで、本研究でも難易度の判定にあたっては、「95%カバー率」をひとつの目安とした。

(3) 各入試問題および中高英語教科書語彙の語彙レベル

本研究では British National Corpus (BNC)を基準尺度とし、その頻度上位何語で各入試問題および教科書の語彙を 95%以上カバーできるかを算定する手法で、入試問題と学校英語教科書の語彙レベルを推定した。「95%」という基準は、上記 Nation (2001)による。基準尺度に用いたリストは、Chujo (2004)で作成した BNC 頻度上位 13,994 語である。

(4) 年代別 16 大学合計入試問題語彙の特徴語

「受験英語」という特定分野の英文の特徴を高く反映する特徴語を抽出するには、対数尤度比という統計指標を利用することができる (Scott, 1999; 中條他, 2005)。本研究では各年代別に 16 大学の入試問題を集めた入試語彙の総リストと、上述の BNC 頻度上位 13,994 語を対数尤度比を用いて統計的に比較し、BNC のような汎用の英文資料の語彙出現状況に比べ顕著な出現状況を示す語を抽出した。

(5) 年代別「中高英語教科書 + 16 大学合計入試問題」語彙の実用性の計測

日本人英語学習者が高校卒業後に大学生となり、グローバル化社会の中で生きるために必要とされる英語という観点から、音声英語と文字英語、各実用 5 種 7 分野の英文に対する中高英語教科書語彙と 16 大学入試問題語彙の総和によるカバー率を計測し、年代別に比較する。その結果は、長谷川・中條 (2004) で調査した英語教科書語彙の実用性の計測結果とも比較するため、表 1 に示した英文資料⁹を用いた。

特に、「英語コミュニケーション能力試験」については、文部科学省 (2003) の「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」に示された英語の到達目標として使用される指標の中から、TOEIC と TOEFL という 2 分野の言語材料を用意した。同様に「情報収集」についても、中條・長谷川 (2003) を参考にして、日本人英語学習者が到達目標にすると考えられるもの (PBS, TIME) と、初心者向けの教育的配慮のあるもの (VOA, News for You) という観点から 2 分野ずつとした。

カバー率の計測は、信頼性の高い計測結果を得るため、Chujo & Utiyama (2005) を参

考にして、分野ごとに 1,500 語のサンプルを 5 個無作為に抽出し、その各々に対するカバー率を求め、その平均値を使用した。なお、TOEIC と TOEFL は試験問題という性格上、問題全体を対象とし、リスニング・セクションとリーディング・セクションについてそれぞれ 2 回分の試験問題のカバー率を計測し、その平均値を使用した。TOEIC と TOEFL は、それぞれリスニング・セクションとリーディング・セクションの延べ語数が各々 3,000 語以上あることから、サンプル 2 個の平均でも安定した結果を得られると判断した(中條・内山, 2003)。

表 1 大学入試問題の実用性の計測に用いた英文資料

	音声英語	文字英語
英語コミュニケーション能力試験	TOEIC (リスニング・セクション)	TOEIC (リーディング・セクション)
	TOEFL (リスニング・セクション)	TOEFL (リーディング・セクション)
大学留学	チュートリアル	大学入学案内
情報収集	PBS (TV ニュース)	<i>TIME</i> (英文雑誌)
	VOA (ラジオ・レポート)	<i>News for You</i> (ESL 英字新聞)
日常生活	サバイバル英語 (生活英語)	生活案内
趣味・教養	映画 (Titanic)	小説 (<i>Harry Potter</i>)

4 . 結果と考察

4.1 延べ語数と異語数

共通一次・センター試験、個別大学入試の各英語問題に使用された英語の語彙について、1988 年、1998 年、2004 年でそれぞれ延べ語数と異語数を計測した結果を表 2 に示した。個別大学は国公立と私立に分類し、そのカテゴリーの中で 2004 年の異語数が降順になるようにした。最下段に示した平均値は、国公立・私立を合わせたものである。

表 2 から、共通一次・センター試験では、延べ語数が年代別に、2541 語 3005 語 2943 語となっており、80 年代と比較して 90 年代と 2000 年代が相対的に多い。異語数では、635 語 657 語 639 語と、ほぼ延べ語数の多寡に比例している。

個別大学入試問題の延べ語数と異語数を年代別に平均値で比較すると、延べ語数は、

1449 語 1826 語 1963 語となっており、試験で使用される英語の分量が年代ごとに増加している。また、異語数は、456 語 555 語 569 語と、使用される語の種類も増加している。したがって、近年の入試英語の特徴のひとつである読解問題の長文化(安竹内, 1997)が、試験問題全体の語彙数の増加に反映しているのではないかと考えられる。

表 2 大学入試問題に用いられた語彙数の変化(単位: 語)

	1988年		1998年		2004年	
	異語数	延べ語数	異語数	延べ語数	異語数	延べ語数
共通一次・センター試験	635	2541	657	3005	639	2943
国公立大学						
東京	584	1872	465	1795	682	2403
筑波	335	846	493	1370	597	1748
九州	475	1452	470	1411	556	1391
東北	512	1593	662	2126	482	1721
東京都立	344	869	405	1073	451	1380
横浜国立	522	1671	552	1553	432	1480
千葉	437	1682	666	1996	420	1199
京都	224	646	309	745	359	892
私立大学						
立命館	438	1603	781	3486	923	4241
上智	584	1998	650	2487	838	3207
関西	500	1493	620	2049	685	2691
同志社	457	1435	672	2535	650	2640
早稲田	470	1156	761	2553	623	2021
関西学院	596	2043	570	1815	595	2005
青山学院	399	1427	446	1429	419	1307
慶應義塾	426	1400	354	790	397	1085
国公立私立大学平均	456	1449	555	1826	569	1963

4.2 入試問題語彙に対する中高英語教科書語彙の割合(カバー率)

中高英語教科書の語彙で個々の入試問題の延べ語数の何%の語が既習となるかというカバー率を計測した結果を、年代別に表 3 に示した。国公立・私立ごとに 2004 年のカバー率で降順に示してあり、最下段の平均値は国公立・私立を合わせたものである。なお、中高英語教科書の異語数は、80 年代: 2779 語、90 年代と 2000 年代: 3098 語であった。

表 3 において、共通一次・センター試験に対する中高教科書語彙のカバー率は、年代順に 94.8% 96.4% 96.4% であり、いずれもほぼ 95% 前後である。したがって、共通一次・センター試験で使用された語彙の選定は、概ね妥当であったと考えられる。また、90 年代

と 2000 年代のカバー率が、80 年代に比較してわずかながら上昇しているということは、近年、センター試験が易しくなったのではないかとされる (cf. 片山他, 1997; 谷口, 1997; 武田, 2004) 一因を裏付けるものと考えられる。

個別大学入試問題に対する中高英語教科書語彙のカバー率を年代ごとに平均で比較すると、89.8% 89.6% 90.0%となり、約 90%でほとんど変化が無い。ただし、カバー率が 90%以上の大学数は、80 年代と 90 年代がそれぞれ 5 校、6 校であるのに対し、2000 年代は 9 校に増加している。したがって、近年、出題者側にも、大学入試問題語彙に対する配慮が現れ始めているのではないかと考えられる。中でも興味深いのは、受験生にとっては最難関の東京大学が、国公立・私立両大学の中で、80 年代 92.9% (3 位)、90 年代 95.8% (1 位)、2000 年代 93.9% (1 位) と一貫して 90%を越え上位にあることである。

表 3 入試問題における中高英語教科書語彙のカバー率 (単位: %)

	1988年	1998年	2004年
共通一次・センター試験	94.8	96.4	96.4
国公立大学			
東京	92.9	95.8	93.9
東京都立	88.5	90.5	92.9
横浜国立	87.7	85.6	92.6
千葉	93.5	88.7	92.2
東北	89.6	91.4	91.9
京都	87.0	88.6	91.0
筑波	92.7	87.1	89.6
九州	90.7	89.9	85.4
私立大学			
関西	88.3	89.8	93.1
関西学院	88.4	90.7	91.6
早稲田	88.1	88.9	90.1
上智	89.5	93.4	89.7
同志社	87.7	88.8	89.7
慶應義塾	89.8	84.7	86.6
立命館	93.0	92.3	86.3
青山学院	89.6	87.9	83.5
国公立私立大学平均	89.8	89.6	90.0

4.3 BNC を基準とした入試問題の語彙レベル

各入試問題の語彙は、対応する中高英語教科書語彙と比較すると相対的にどのような位

置付けになるのかを、BNC 頻度上位語の語数で表して比較した結果を図 1 に示した。図の数字は各試験・教科書語彙を 95%カバーするのに必要な BNC 頻度上位語の語数である。図には年代ごとに各試験における語彙レベルの平均値と、学習者の語彙レベルを表すと考えられる学校英語教科書の語彙レベルも示した。大学受験者は中学と高校の教科書を使用して英語の基本的部分を学習してきているため、中高英語教科書語彙が彼らの語彙レベルの目安と考えられるからである。

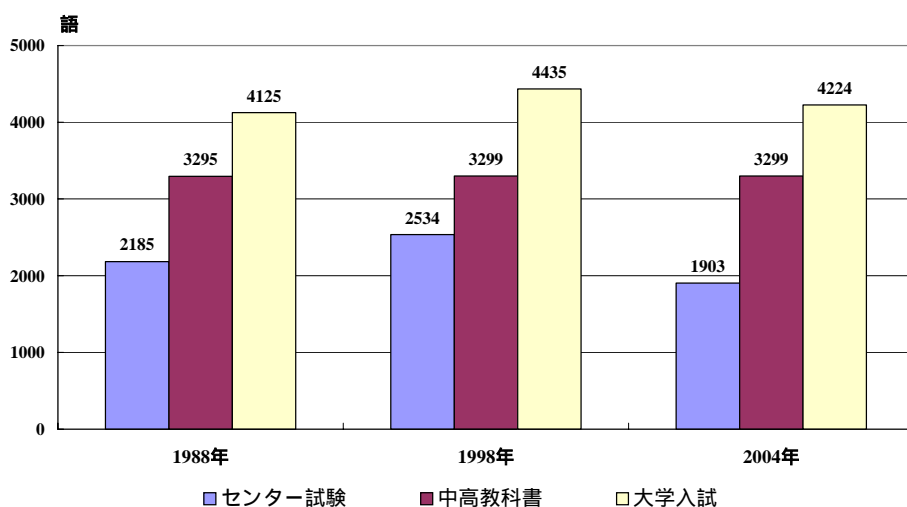


図 1 入試問題と中高教科書の語彙レベルの年代別比較

図 1 から、共通一次・センター試験は年代順に、2185 語レベル 2534 語レベル 1903 語レベルであり、いずれも対応する中高教科書の語彙レベル（80 年代：3295 語レベル、90 年代と 2000 年代：3299 語レベル）より低いので、高校修了時の英語の学力をみる試験として妥当なレベルであると考えられる。

一方、個別大学入試問題の語彙レベルは年代別平均で、4125 語レベル 4435 語レベル 4224 語レベルであり、対応する中高教科書の語彙レベルと比較して、明らかに難易度が高いと考えられる。平均値に加え、個々に観察した大学入試問題の語彙レベルからも、国公立・私立に関わりなく、各年代を通じて全ての大学入試問題が中高教科書の語彙レベルを超えていたことも確認したことを付記する。

4.4 大学入試英語問題の特徴語

大学入試問題の特徴付ける語を、対数尤度比を用いて、一般的な英語使用を代表すると

考えられる BNC と比較することによって抽出し、その特徴度の強い順に上位 20 語を表 4 に示した。なお、調査対象となった 16 大学入試英語問題の総和から求めた異語数は、1988 年：2934 語、1998 年：3407 語、2004 年：3432 語であった。

表 4 大学入試問題の特徴語

順位	1988年入試	1998年入試	2004年入試
1	fast-food	language	fish
2	snake	tsunami	tooth
3	blacksnake	child	print
4	restaurant	deep-sea	overfish
5	fry	patina	shrimp
6	weighing-machine	family	downtown
7	food	dolphin	dentist
8	frontier	alcohol	tear
9	mother	ocean	baby
10	we	listen	advertiser
11	dead	dream	aquaculture
12	resurrection	information	fisher
13	lecture	facial	culture
14	author	parent	mathematics
15	gentility	we	preservation
16	philosophize	oxidize	recreational
17	doublet-and-hose	prejudge	gender
18	corn	learn	people
19	I	communication	difference
20	civilization	human	mangrove

表 4 から、各年代における各入試問題の特徴語第 1 位にランクされた語は、88 年：fast-food、98 年：language、04 年：fish である。これらの語と上位 20 位以内に入った他の語を合わせて考えると、88 年は restaurant, fry, food, corn など「食文化」について、98 年は listen, information, learn, communication など「言語」について、04 年は overfish, shrimp, aquaculture, fisher, preservation, mangrove など「自然保護」についてのトピックが、大学入試問題の、特に長文読解問題の特徴をなしていたのではないかと推察される¹⁰。さらに、98 年は tsunami, deep-sea, dolphin, ocean など「海洋」について、child, family, parent, human など「家族関係」についてのトピックも考えられる。

2004 年度入試に出題された長文問題のトピックを分析した旺文社(2004a, b)によれば、国公立・私立いずれも上位 3 位までは、「文化」「日常生活」「自然」の順で合計 70%以上を占めている。表 4 からは、このようなトピックが 1980 年代より続いているのではないかと推測できる。

大学入試問題に出題されるトピックは、その時代に関心を集めた事柄が取り上げられる可能性が高いのは、受験関係者には周知の事実である。時の話題に関するキーワードをその都度学習しておくことは、実践的コミュニケーション能力を高める上でも重要なことと考えられる。受験生にとっては、特定のトピックと関連語彙の知識が合否に影響を与えることも示唆されている (Brown & Yamashita, 1995a: 27)。また、大学入試の望ましくない波及効果が強調されるなかで、本来あるべき望ましい波及効果として、Mulvey (1999: 132)は具体例を挙げ、読解スキルの習得等のほかに語彙の補強を挙げている。このことから、視点を変えた入試問題の利用もありえるのではないかと考えられる。ただし、あくまでも受験生の学習負担が過剰にならないような配慮をすべきことは言うまでもない。

4.5 入試英語語彙の実用性

受験生は受験準備として過去に出題された入試問題を学校の内外で使用するため、本研究では、大学入学時の学生の語彙力の上限を、中高教科書語彙に加えて、今回調査に使用した 16 大学の入試問題語彙を全て習得したと仮定した。その際、どの程度の実用性が期待できるかを、音声英語と文字英語について各 5 種 7 分野で計測した。結果はそれぞれ表 5 と表 6 に示した。表中の各年代において、左列がその年代に使用された中高英語教科書のみによるカバー率、右列(網掛部分)が「中高英語教科書 + 16 大学入試英語問題」によるカバー率である。最下段には、各々 7 分野の平均カバー率と未知語に遭遇する割合¹¹を示した。なお、1990 年代と 2000 年代では、受験生の学習した教科書語彙が共に 90 年代の学習指導要領に基づいているため、左列の数値が等しくなっている。調査対象とした「中高英語教科書 + 16 大学入試英語問題」の異語数は、1988 年 : 4170 語、1998 年 : 4664 語、2004 年 : 4662 語であった。

4.5.1 音声英語について

表 5 から、中高英語教科書のみのカバー率で、80 年代教科書と 2005 年 3 月まで使用されていた 90 年代教科書を比較すると、90 年代教科書の方が実用 7 分野のほぼ全てにおいてカバー率が上昇し、平均値で見ても、91.4% から 92.4% に上昇している。

次に、教科書語彙に入試語彙を加えた(網掛部分) 「80 年代教科書 + 88 年入試」、「90 年代教科書 + 98 年入試」、「90 年代教科書 + 04 年入試」を比較すると、実用 7 分野に対するカバー率の平均は、 から へ向かって、94.1% 95.0% 95.5% と近年になるに

つれて上昇している。結果的に入試問題語彙を習得すれば、実用性の向上が期待できる可能性が見て取れる。

表 5 年代別に見た教科書と入試語彙の音声英語の英文資料に対する実用性

	音声英語	1980年代		1990年代		2000年代	
		80年代教科書	+88年入試	90年代教科書	+98年入試	90年代教科書	+04年入試
英語コミュニケーション能力試験	TOEIC (リスニング・セクション)	90.8	93.9	91.7	94.6	91.7	95.2
	TOEFL (リスニング・セクション)	91.7	95.1	92.5	95.1	92.5	95.9
大学留学	チュートリアル	91.3	94.6	92.9	96.2	92.9	96.1
情報収集	PBS (TVニュース)	87.2	90.9	89.1	92.8	89.1	93.6
	VOA (ラジオ・レポート)	88.6	92.2	90.4	94.2	90.4	95.3
日常生活	サバイバル英語 (生活英語)	97.1	98.1	96.8	97.3	96.8	97.7
趣味・教養	映画 (Titanic)	92.8	94.3	93.2	94.8	93.2	94.5
	平均カバー率	91.4	94.1	92.4	95.0	92.4	95.5
	未知語に遭遇する割合 (語)	11.6	17.1	13.1	20.0	13.1	22.1

実用 7 分野の項目別に見た場合、カバー率が 95%以上になっているのは、では「TOEFL (リスニング・セクション)」と「サバイバル英語 (生活英語)」だけであるが、では「チュートリアル」が加わり、ではさらに「TOEIC (リスニング・セクション)」と「VOA (ラジオ・レポート)」が加わって、7 分野中 5 分野になる。したがって、大学入試問題語彙は、近年では実用的分野にも広がりを見せていると言える。

近年の時代的变化として見た場合、98 年入試と 04 年入試では、受験生の学習した教科書語彙が共に 90 年代の学習指導要領に基づいているため、カバー率の向上は 98 年と 04 年の入試問題の変化を如実に反映している。したがって、明らかに 98 年より 04 年の入試問題語彙の方が実用性が高いと考えられる。特に 04 年では、TOEIC のリスニング・セクションでカバー率が 95%を超えたことは注目に値する。TOEIC と並んで英語能力判定の資料に利用されることの多い TOEFL においては、1980 年代ですでに 95%を超えている。一方、TOEIC では 2000 年代になってようやく 95%を超えた。昨今、大学英語教育の中で TOEIC 対策の授業を展開しているところも増えているが、試験問題作成者にも TOEIC の問題が意識されているのではないかと推測できる。

4.5.2 文字英語について

表 6 から、まず中高英語教科書のみのカバー率を観察すると、実用 7 分野に対するカバー率の平均(表中最下段)は、80 年代教科書と 90 年代教科書とでは 83.2%から 85.3%に上昇している。実用 7 分野のそれぞれを見ても、全ての分野でカバー率が上昇している。しかしその 90 年代教科書でさえ、95%カバー率を目安にした場合、音声英語では平均 2.6% (95% - 92.4%) 不足していたのに対し、文字英語では平均 9.7% (95% - 85.3%) 不足しており、英語を聞いて理解する場合にも困難を生じるが、読んで理解する場合には、それ以上の困難が予想される。特に、「生活案内」「TIME (英文雑誌)」「TOEIC (リーディング・セクション)」の分野におけるカバー率が低い。

表 6 年代別に見た教科書と入試語彙の文字英語の英文資料に対する実用性

文字英語	1980年代		1990年代		2000年代	
	80年代教科書	+88年入試	90年代教科書	+98年入試	90年代教科書	+04年入試
英語コミュニケーション能力試験 TOEIC (リーディング・セクション)	80.0	87.1	81.7	88.6	81.7	89.6
TOEFL (リーディング・セクション)	82.9	88.9	85.2	90.8	85.2	90.7
大学留学 大学入学案内	81.9	89.6	84.0	90.5	84.0	91.1
情報収集 TIME (英文雑誌)	79.7	85.0	82.2	86.9	82.2	87.5
News for You (ESL英字新聞)	88.5	92.3	90.2	93.4	90.2	93.9
日常生活 生活案内	78.2	85.3	80.9	87.8	80.9	88.3
趣味・教養 小説 (<i>Harry Potter</i>)	91.1	93.1	92.7	93.9	92.7	94.2
平均カバー率	83.2	88.8	85.3	90.3	85.3	90.8
未知語に遭遇する割合(語)	5.9	8.9	6.8	10.3	6.8	10.8

一方、教科書語彙に入試語彙を加えた(網掛部分) 「80 年代教科書 + 88 年入試」、「90 年代教科書 + 98 年入試」、「90 年代教科書 + 04 年入試」を比較すると、文字英語における実用 7 分野に対するカバー率の平均は、 から へ向けて、88.8% 90.3% 90.8% とわずかであるが増加している。実用 7 分野の分野別に見ても、 と時代を追うごとに、ほぼ全ての項目でカバー率が上昇している。とはいえ、どの分野においてもカバー率が 95%には到達できていない。

の「教科書語彙 + 04 年入試」においてカバー率が相対的に平均(90.8%)より高い分野

は、高い順に「小説 (Harry Potter)」(94.2%)、「News for You(ESL 英字新聞)」(93.9%)、「大学入学案内」(91.1%)である。一方において、英語上級レベルの学生や社会人の目標とする「TIME (英文雑誌)」(87.5%)や、学校英語教科書の弱点として指摘されてきた日常生活語彙 (中條他, 1993; 長谷川・中條, 2004) に該当する「生活案内」(88.3%) が相対的に低い。大学においては、このような分野の語彙の補強が必要であると言える。とりわけ、中高英語教科書から大学入試英語問題に至るまで全ての学習段階を通して不足する日常生活語彙については、その指導に関して特別な配慮が必要であると考えられる。

近年、英語教育の到達目標値を設定する際にしばしば利用される「TOEIC」と「TOEFL」において、 のリーディング・セクションのカバー率はそれぞれ 89.6%と 90.7%である。各リスニング・セクションがそれぞれ 95.2%と 95.9%であることを考慮に入れると、大学生の TOEIC、TOEFL 両テストの試験対策のひとつとしては、リーディング・セクション用の語彙を補強する必要があると考えられる。ただし、中高教科書語彙に大学入試問題語彙を追加することによるカバー率の上昇値を 3 年代と比較すると、90 年代教科書語彙に 04 年入試語彙を追加した場合の「TOEIC」が最大(7.9 ポイント: 89.6% - 81.7%)である。したがって、音声英語と同様に文字英語においても、近年、コミュニケーション能力試験への関心の高まりが入試問題の作成に影響を与えているのではないかと推測できる。

5 . まとめ

日本の大学入試英語問題に出題される英語は「受験英語」と呼ばれ、大学に入るための特殊な英語であって、実用面ではあまり役立たないのではないかと一般に考えられてきた。さらに、その語彙の難易度は、文部 (科学) 省の学習指導要領に基づく中高英語教科書語彙のそれを超えて、難しすぎるのではないかとということがしばしば指摘されている。そこで、本研究の目的は、大学入試英語問題全体に使用される英語語彙の妥当性と実用性を、1980 年代、1990 年代、2000 年代とに分けて実際に調査し検証することであった。

結果から判明したことは、(1) 本稿で調査した個別大学入試英語問題語彙は、異語数と延べ語数が 1980 年代から 2000 年代に向けて近年増加していること、(2) 中高英語教科書語彙によるカバー率が、共通一次・センター試験問題語彙では 3 年代を通じてほぼ 95% 前後であるのに対し、個別大学入試英語問題語彙は平均 90% であること、(3) BNC を基準とした相対的な語彙レベルが、共通一次・センター試験問題語彙では中高英語教科書語彙より低いのに対し、個別大学入試英語問題語彙では高いこと、(4) 個別大学入試英語問題

の特徴語は各時代の話題と関係がありそうなこと、(5) 中高英語教科書語彙に 16 大学合計入試英語問題語彙を加えると、カバー率が音声英語では 7 分野中 5 分野で 95% 以上であるのに対し、文字英語ではどの分野でも 95% には及ばなかったものの、音声英語・文字英語共に近年カバー率が上昇しているということであった。

したがって、個別大学の入試英語問題作成にあたっては、使用される語彙が中高英語教科書語彙の難易度を超えているという、従来からの指摘を充分考慮に入れる必要があると考えられる。一方で大学受験生にとって、受験英語は将来必要となる実用面で役立つ可能性が高いということが確認できたことは、朗報と言えるだろう。また、視点を変えて、大学入試問題を語彙力補強のための牽引車となる教材として、積極的に利用していこうという方法も考えられる。しかし、受験生の学習負担を考えると、必ずしも現状を肯定して良いわけではないように思われる。このような現実を踏まえつつ、個別の大学入試英語問題語彙の選定においては、今後、さらに改善がなされることにより、中・高の教育現場への望ましい波及効果が高まることを期待したい。

注

1. 別府(2003)がこのように判断するのは、Beppu(2001)、宇都・柳瀬(2000)のデータを根拠としている。Beppuは1996~2000年の5年間にわたる国公立5大学、私立大学20学部、およびセンター試験5回分の延べ合計130の入試問題を、宇都・柳瀬は1998年の国立40大学・47学部、公立13大学・13学部、私立51大学・83学部の全問題から長文問題を対象として調査した。
2. リーダビリティという指標を使用して大学入試に出題される読解問題の難易度調査をしたものには他に、短期大学での調査をしたKimura & Visgatis(1996)、四年制大学での調査をしたBrown & Yamashita(1995a, b)がある。結果としていずれも、リーダビリティには幅があるものの、高校卒業レベルとしては難易度が高すぎる問題を出題している短期大学、四年制大学がかなりあることが指摘されている。
3. 「共通一次試験」が始まったのは1979年1月である。その後、1990年からは「大学入試センター試験」となり現在に至っている(清水, 1997: 16)。本研究で調査対象とする入試問題は、1980年代から2000年代までの範囲であるため、「共通一次・センター試験問題」と表記することにする。
4. 国立大学は2004年4月より「国立大学法人」となり、公立大学は2005年4月時点で

は随時「公立大学法人」に移行しているが、受験関係誌では国公立大学という旧来の名称が使用されているため、本研究においてもこの呼称に従う。

5. 1990 年代の学習指導要領は、中学校で 1991 年に施行された 3 年後の 1994 年に高等学校で施行されており、接続年度がつながっている。一方、1980 年代の学習指導要領では、中学校で 1981 年に施行された 3 年後の 1984 年が、本来、高等学校での純粋な施行年度となるべきであるが、1982 年施行となっている。

6. 『2004 年度大学入試 代ゼミデータリサーチ VOL.3』(代々木ゼミナール JEC 日本入試センター, 2003)、『2005 年度国公立大・難易ランキング』(ベネッセコーポレーション, 2004)、『2005 年度私立大・難易ランキング』(ibid.) を参考にした。

7. 結果的に、1988 年入試は 1982 年 4 月～1996 年 3 月まで使用された教科書、1998 年入試と 2004 年入試は 1994 年 4 月～2005 年 3 月まで使用された教科書となった。

8. 2005 年から首都大学東京と校名を変更したが、調査対象とした入試問題は 2004 年までのものなので旧来の校名を用いる。

9. 出典の詳細は、長谷川・中條 (2004: 153) より次のとおりである。

- (1) 英語コミュニケーション能力試験
TOEICリスニング・セクション, TOEICリーディング・セクション
TOEIC公式ガイド&問題集 Vol.1 (2000), 2 (2002) 練習テスト
TOEFLリスニング・セクション, TOEFLリーディング・セクション
TOEFL Practice Tests Vol.2 (1999), Practice Tests A, B
- (2) 大学留学
大学チュートリアル (British National Corpus)
1st-year undergraduate tutorial: linguistics (G4W), Economics tutorial (HYL)
大学入学案内
International Programs and Services (<http://www.columbia.edu/cu/isso/>)
- (3) 情報収集
PBS (TVニュース)
Inspecting Iraq 他5編 (2002, http://www.pbs.org/newshour/newshour_index.html)
TIME (英文雑誌)
A Bad Menu for Peace 他 16 編 (2002, <http://www.time.com/time>)
VOA (ラジオ・レポート)
FAO Water Report 他19編 (<http://www.eigozai.com/USA/USA.htm>)
News for You (ESL英字新聞)
Enron Under Investigation 等5週分 (2002)
- (4) 日常生活
サバイバル英語 (生活英語)
eigozai ENGLISH USA (<http://www.eigozai.com/USA/USA.htm>)
生活案内
Official web site of the City of White Plains (<http://www.cityofwhiteplains.com/>)
- (5) 趣味・教養
映画
Titanic (<http://www.pumpkinsoft.de/screenplay451/>)
小説
Harry Potter and the Philosopher's Stone, 1～5章 J.K. Rowling (1997)

10. 旺文社(2004a, b)によれば、2004年度入試の英語問題全体に占める読解問題の割合は、国公立大で73.5%、私立大で52.5%であった。また、安竹内(1997)でも指摘されているように、現在の入試英語を支えている特徴のひとつは、読解問題の長文化である。これらのことを考慮に入れると、本研究では英語問題全体で使用される語彙を対象にしているが、その過半数は読解問題で使用された語彙で、特徴語の多くは長文読解問題に起因しているのではないかと推定できる。

11. 羽鳥他(1979: 110)によれば、未知語に遭遇する割合が20語に1語であれば、なんとか英語のテキスト理解が可能であるという。したがって、20語よりも少なければ理解が困難であると考えられる。20語に1語というのは、95%カバー率に該当する。

参考文献

- 安竹内ひろし(1997)。「大学入試英語問題 悪い問題・良い問題」、『現代英語教育』, 第34巻, 第8号, 4-9.
- Beppu, Y. (2001). An analysis of the university entrance examinations focusing on some sentence structures. 『東京学芸大学大学院英語研究会紀要(LEO)』, Vol. 31, 35-60.
- 別府有紀(2003)。「大学入試が高校英語教育に対して与える影響」、『関東甲信越英語教育学会研究紀要』, 第17号, 77-88.
- Brown, J. D. & Yamashita, S. O. (1995a). English language entrance examinations at Japanese universities: What do we know about them? *JALT Journal*, Vol.17, No.1, May, 7-30.
- Brown, J. D. & Yamashita, S. O. (1995b). English language entrance examinations at Japanese universities: 1993 and 1994. In Brown & Yamashita (Eds), *The Language Teaching in Japan* (pp.86-100). Tokyo: JALT.
- 中條清美・長谷川修治・竹蓋幸生(1993)。「日米英語教科書の比較研究から」、『現代英語教育』, 第29巻, 第12号, 14-16.
- 中條清美・長谷川修治(2003)。「時事英語の授業で用いられる英文素材の語彙レベル調査 BNC (British National Corpus) を基準にして」、『時事英語学研究』, No.XLII, 51-62.

- 中條清美・内山将夫 (2003). 「英文素材の語彙レベル計測に関する基礎的研究」. 第 36 回
日本大学生産工学部学術講演会教養・基礎科学部会講演概要 . 7-8.
- 中條清美・長谷川修治 (2004). 「語彙のカバー率とリーダビリティから見た大学英語
入試問題の難易度」. 『日本大学生産工学部研究報告 B』, 第 37 巻, 45-55.
- Chujo, K. (2004). Measuring vocabulary levels of English textbooks and tests using a
BNC lemmatised high frequency word list. In J. Nakamura, N. Inoue, & T. Tabata
(Eds.), *English Corpora under Japanese Eyes* (pp. 231-249). Amsterdam: Rodopi.
- Chujo, K. & Utiyama, M. (2005). Understanding the role of text length, sample size
and vocabulary size in determining text coverage. *Reading in a Foreign Language*,
Vol. 17, No. 1. <http://nflrc.hawaii.edu/rfl/>.
- 中條清美・内山将夫・長谷川修治 (2005). 「統計的指標を利用した時事英語資料の特徴語
選定に関する研究」. 『英語コーパス研究』, 第 12 号, 19-35 .
- 長谷川修治 (2003). 「英検 2 級とセンター試験に対する英語教科書語彙の効果 過去
10 年間の通時的調査」. 『STEP BULLETIN』, Vol. 15, 日本英語検定協,
152-158 .
- 長谷川修治・中條清美 (2004). 「学習指導要領の改訂に伴う学校英語教科書語彙の時
代的变化 1980 年代から現在まで」. 『Language Education & Technology』, 第 41
号, 外国語教育メディア学会 (LET), 141-155 .
- 羽鳥博愛他 (1979). 『英語指導法ハンドブック 4 <評価編>』. 東京: 大修館書店 .
- 深沢清治 (1999). 「大学入試悪者論を越えて」. 『現代英語教育』, 第 35 巻, 第 12 号,
59 .
- 伊村元道 (2003). 『日本の英語教育 200 年』. 東京: 大修館書店 .
- 時事通信社. 『内外教育』. (12/18,1987; 12/10,1993; 1/10,1995; 1/26,1996; 1/14,1997;
1/16,1998; 1/26,1999; 1/14,2000; 1/16,2001; 1/30,2001; 1/11,2002; 12/3,2002) .
- 苅谷剛彦 (2003). 『なぜ教育論争は不毛なのか 学力論争を超えて』. 東京: 中央公論新
社 .
- 片山七三雄・大谷道子・金谷憲 (1997). 「変わりゆく入試英語と高校での対応」. 『英語
展望』, No.104, Summer, 19-24, 14 .
- 川澄哲夫 (編) (1978). 『資料日本英学史 2・英語教育論争史』. 東京: 大修館書店 .
- Kimura, S. & Visgatis, B. (1996). High school English textbooks and college entrance

- examinations: A comparison of reading passage difficulty. *JALT Journal*, Vol. 18 No. 1, 81-95.
- 小林功 (2000). 「2000 年度の大学入試問題の傾向と今後の課題 改善が見られない大学入試問題」. 『英語教育』, 第 49 巻, 第 3 号, 12-15 .
- 小林功 (2003). 「入試の英単語と学習法を巡って」. 『英語通信』, 第 33 号, 8-9 .
- Matsuo, H. (2000). An analysis of Japanese high school English textbooks and university entrance examinations: A comparison of vocabulary. *ARELE*, Vol. 11, 141-150.
- 文部科学省 (2003). 「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」.
- Mulvey, B. (1999). A myth of influence: Japanese university entrance exams and their effect on junior and senior high school reading pedagogy. *JALT Journal*, Vol. 21, No. 1, 125-142.
- Nation, I. S. P. (2001). *Learning vocabulary in another language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 新里眞男 (1990). 「高校から大学入試を見ると」. 『英語教育』, 第 39 巻, 第 9 号, 22-23 .
- 旺文社 (2004a). 『2005 年受験用全国大学入試問題正解 英語 (国公立大編)』.
- 旺文社 (2004b). 『2005 年受験用全国大学入試問題正解 英語 (私立大編)』.
- 酒井邦秀 (1996). 『どうして英語が使えない?』. 東京: 筑摩書房 .
- 佐藤学 (2001). 『学力を問い直す 学びのカリキュラムへ』. 岩波ブックレット No.548 . 東京: 岩波書店 .
- Scott, M. (1999). *WordSmith Tools Manual* [Computer Software]. Oxford: Oxford University Press.
- 清水裕子 (1997). 「「大学入試センター試験」の変遷 問題構成と配点をもとに」. 『英語教育』, 9 月増刊号, Vol.46, No.7, 16-18 .
- 出版労連 (1987). 『教科書レポート』, No.31 .
- 出版労連 (2002). 『教科書レポート』, No.46 .
- 武田一 (2004). 「2004 年度入試を斬る! 高校入試 / センター試験 / 大学入試」. 『英語教育』, 10 月増刊号, Vol. 53, No. 8, 73-87 .
- 谷口賢一郎 (1997). 「新学習指導要領でセンター試験はどう変わったか」. 『現代英語教

育』, 第 34 卷, 第 3 号, 8-12.

田崎清忠 (2000). 「日本人にとっての「英語力」を見極めよ」. 『英語教育』, 第 49 卷, 第 2 号, 8-19.

宇都裕・柳瀬実佳 (2000). 『大学入試における「和訳」の比重と内容 1998 年度大学入試英語問題の徹底的研究 国・公立大学編、私立大学編の分析から』. 東京: 学校法人文京学園 文京語学教育研究所.

若林俊輔 (1988). 「入試英語」. 『英語教育』, 9 月増刊号, Vol. 37, No. 7, 65-67.

Watkins, G.・河上道生・小林功 (1997). 『これでいいのか大学入試英語』(上下巻). 東京: 大修館書店.